

眠って見る「夢」を遊び楽しむ

高田公理 (佛教大学社会学部教授)
Masatoshi Takada



な「ないものを見せてくれるしかけ」なのだ。

で、それらは「ない」のだから「虚」というほかない。しかし「見える」という点では「実」でもある。かつて歌舞伎や浄瑠璃の作者として活躍した近松門左衛門は、そんな微妙な境目、つまり「虚と実の間」に「遊び」が生まれるのだといった。

「眠って見る夢」と「将来の夢」

そこで、あらためて「夢」である。それは本来「夜、眠っているときに見る」ものだ。だから当然「現実」ではない。だが、夢のお告げ、正夢、予知夢などといった言葉もある。

現代に生きるぼくらは、

「そんなことは科学的にありえない」

と考えがちだ。それでも、やっぱり気にはなる。ときに夢のなかのできごとが、仕事上の問題や日頃の悩みを解くきっかけになったりもする。

そういえばニューギニアの高地民族は、夢のなかのできごとを、現実のできごとと区別しないのだそう。だから、夢のなかで誰かに悪さをしたら、目覚めたのち、

「さっきはごめん。悪かった」

とあやまる。あやまられたほうも、ごく普通に受け流すという。

べつだん彼らが遅れているわけではない。ぼくらと夢の理解の仕方がちがうだけだ。

そこで、月並みだが「夢」の語義を『広辞苑』で調べてみた。すると冒頭に「イメ（寝目）の転」と書いてある。本来それは「夜（寝ているときに）目（に見えるもの）」を意味した。これはそのまま「①睡眠中にもつ幻覚」という語義につながる。

ところが、最後に「④将来実現したい願い」という語義が出てくる。ただし『広辞苑』の第一版（1955年）、第二版（1969年）には、④の語義は記されていない。それが初めて登場するのは第三版（1983年）なのだ。

とはいえ、ぼくが小学校5、6年生だった1960年前後、作文の課題に「将来の夢」が出たという記憶がある。それは「将来実現したい願い」としての「夢」にほかならない。

こうした意味での「夢」の使われ方が、いつ始まったのか。残念ながら正確なことは分からない。しかし、社会の規範としての「身分の縛り」を振り切って、自由意志と能力で個人が、みずからの将来を切り開いていけるようになった明治以後、英語のdreamの翻訳語としての「夢」に、そうした意味が付与されたのではないかと考えられる。

それから百年余り、高度経済成長の進展に伴って、いよいよ「将来実現したい願い」に現実性が出てきた。そんな時代の風潮を捉えて『広辞苑』も、それを新しい語義として定着させたらしい。

同時に、最近の日本語では「夢」を「眠っているときに見る夢」の意味で使う機会は確実に減っているように思われる。実際、2004年（平成16）に至る10年間に発行された『朝日新聞』紙上で「夢」という単語を検索してみたところ、全体の約95パーセントが「将来実現したい願い」という意味で使われていることが判明した。

はたして、このことは「夢のある話」なのか、そうではないのか。「このころの未来」との関係で少し考えてみたい。

夢の働き——芸術の創造と科学上の発見を助ける

まずは「眠って見る夢」である。かりに毎日、だいたい8時間程度の

「虚」と「実」の「間」に遊ぶ

幼い子どもが、両手で持った丸いお盆を、右へ左へと回転させている。

「ぶるん、ぶつぶーっ、だっだっだっだっ一、ごとん」

ずいぶん調子が出ている。お盆をハンドルに見立てて、自動車ごっこに夢中になっているのだ。

しかし、本気で「お盆」を「ハンドル」だと思っているわけではない。もしそうなら、ちょっとおかしい。でも「なかばは本気」だ。そうでないと面白いはずがない。

「夢中」というのは「夢の中」……。もっとも、この子どもは眠ってなんかいない。でも、きっと視線の先に、自動車のボンネットの「幻」が見えている。「丸いお盆」は「ハンドル」の姿を映し出す「メディア」——「夢」「幻」「メディア」は、み

睡眠をとるとする。人はその間、4、5回に分けて合計90分ぐらいは夢を見ている。

最初の夢は、寝入りばなの「うとうと」が本格的な眠りに移るころ、色のついた光や幾何学模様が現れる。そのうちに人の顔、空を真っ赤に染めて沈む夕陽、燦々と陽の光が降り注ぐ林や野原が見えたりする。

20世紀の芸術に大きな影響を及ぼしたシュール・リアリズムの画家の1人、フランシス・ピカビア (Francis Picabia : 1879-1953) は、そんな寝入りばなのイメージを巧みに表現した「パピヨン」という作品を残している (図1)。

これは一見、馬を描いているように見える。しかし、しばらく眺めていると蝶のイメージが浮き出してくる。時間と空間の秩序が崩壊しているのだ。

入眠後しばらく経ったときに見る、そんな夢を巧みに描き出した作品として、この絵は睡眠学者によって高く評価されている。

その後、眠りは、徐々に深くなっていく。ところが、やがて筋肉がゆるんで、体は動かないのに、眼球だけが急速に動く時期がやってくる。そんな眠りを「REM (rapid eye movement : 急速眼球運動) 睡眠」という。このとき、人は本格的に夢を見る。

その夢が、ときに現実に大きな影響を及ぼすことがある。たとえば、のちに鎌倉幕府を開くことになる源頼朝と結ばれた北条政子 (1157-1225) は、夢の力を借りて高い社会的地位を得たという。史料はないが、『蘇我物語』に、こんな話が記されている。

いわく、政子の2歳年下の妹が「高い峰にのぼり、月と太陽を左右の袂におさめる」奇妙な夢を見た。それを耳にした政子は「なんと恐ろしい夢でしょう。禍をもたらす不吉な夢

著作権者・所蔵者の権利保護のため画像は閲覧できません。



図1 フランシス・ピカビア《パピヨン》1929年
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010

だから、私が買ってあげましょう」——当時、不吉な夢を見たら、それを他人に売ることによって禍から逃れられるという考え方があったらしい。

そこで妹は、政子が与えた小袖の代償として、いわば「夢を売る」ことになった。政子は「日月をつかむ夢」が、たいへんな吉夢であることを知っていたのだ。そして政子は、本来なら妹と結ばれるはずだった頼朝と結ばれ、みごと天下人の妻になる。

そうかと思うと、不吉な夢を見ても、仏様に祈れば、吉夢に変えてくれるという信仰があった。いまも法隆寺に所蔵されている「夢違観音」(観音菩薩立像) は、そんな事例の典型だろう。この仏様の顔は丸顔で、額に化仏をつけ、唇には優しい微笑みを浮かべ、左手に小さな水瓶を持っている (図2)。

こうしてみると昔の日本人は、さきに紹介したニューギニア高地の人々とは意味がちがうが、夢と現実との間に、なにかしらの関係を想定していたことになる。

ところが、少し時代を下って室町時代になると、夢と現実を峻別する考え方が力を持ち始める。たとえば南北朝の動乱を描いた軍記物語『太

著作権者・所蔵者の権利保護のため画像は閲覧できません。

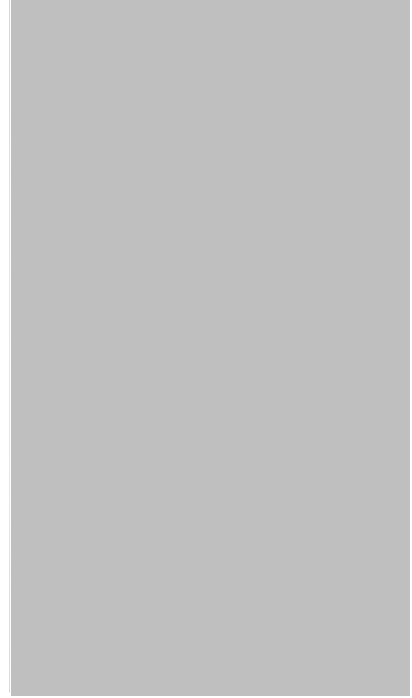


図2 夢違観音像 (所蔵:法隆寺、写真提供:奈良国立博物館、撮影:森村欣司)

平記』に登場する武士の青砥左衛門は、相模の守が見た夢のお告げをもとに、恩賞の領地を与えられそうになる。

でも、当の青砥は、これを固辞する。不思議はない。もし相模守が、まったく逆の内容の夢を見たら、所領を没収されることになるのではないかと考えたのだ。

そこには「夢と現実とは別世界のできごと」だと考える、ぼくら現代人に通じる思いが芽生えていたのだろう。

しかし他方、人間のさまざまな創造活動に夢が果たしてきた役割を否定することもできそうにない。

たとえば、ジュゼッペ・タルティーニ (Giuseppe Tartini : 1692-1770) というイタリアの作曲家は、ある夜、悪魔がみごとにバイオリンを演奏する夢を見た。その曲のあまりの美しさに、目覚めるとすぐメロディを楽譜に書き留める。バイオリン・ソナタ・ト短調「悪魔のトリル (Trillo del Diavolo)」は、こうして作曲された。



図3 アウグスト・ケクレ

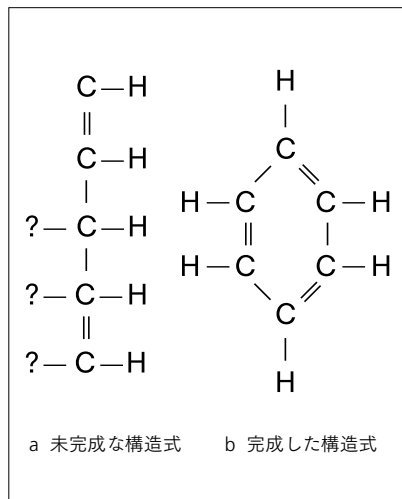


図4 ベンゼンの構造式



図5 ウロボロス

あるいは、時代が現代に近づいた19世紀にも、ドイツの化学者アウグスト・ケクレ (Friedrich August Kekulé von Stradonitz: 1829-1896) は、夢に見たイメージをもとにベンゼンの構造式を発見した (図3)。

すでにベンゼンという物質の分子式がC₆H₆であることは分かっていた。しかし、その構造式が分からない。図4aでは炭素 (C) の結合手が余ってしまって具合が悪い。そこで、この問題を解決するために、いろいろ考えていたある夜、仕事部屋の椅子でうたた寝していた彼は、つぎのような夢を見た。

私の眼前ではまたもや原子がめまぐるしく動いていました。……すべてはヘビのようにからみあい、回転しつつ運動していました。ところで、あれは何だろう？ ヘビのうちの一匹が自分の尻尾をくわえて、その象が私の眼前であざ笑うように旋回しているのです。私は、まるで電撃に打たれたように目ざめました。そして、こんどもまた、この仮説の帰結を仕上げするために、その夜の残りを費やしたのです。……皆さん、私たちは夢みることを学びましょう。そうすればおそらく真理を発見するでしょう」(1890年のケクレ祭で

の講演。渡辺恒夫『人はなぜ夢を見るのか——夢科学四千年の間いと答え』化学同人、DOJIN選書、2010年より)

ここで「自分の尻尾をくわえたヘビ」とは、大昔から伝えられてきた「ウロボロス」という名の象徴性の高い図柄のひとつである (図5)。それがケクレに、図4bのような構造式を思いつかせるきっかけになった。

芸術の創造や科学の新発見などに関連する、こうした事例は枚挙にいとまがない。目覚めているときに、一所懸命、考えたり感じたりしていることが、眠っているときに見る夢のなかで一挙に解決されたり、素晴らしい創造に昇華されたりする。

どうやら夢には、そんな力が備わっているらしい。

「存在しないもの」を見たり、聴いたりする

ここで大切なことは、

「そこに存在しないものを見たり、聴いたりする」

ということだ。芸術家でも科学者でも、独創的な仕事をした人とは、一言でいうと「そこに存在しないものを見たり、聴いたりした人」だといえるのではないか。

たとえば、ゴッホの「星月夜」と

いう絵を思い出してみよう (図6)。こんな風景は、ゴッホ以前には誰も目にしたことがない。それを彼の「天才」は、夢の中なのかどうかは知らないが、いつか心のなかで、たしかに「見た」のだ。1960年代のイギリスから出て、20世紀の音楽シーンに巨大な革命をもたらしたビートルズだって、彼らの誰かが心のなかで「聴いた音楽」を演奏することで作品として定着したのだからいない。

つまり「独創」とは、特別な才能を持った人が、普通の人に先駆けて「見たり、聴いたり」したことを表現したものにほかならない。それが、夢のなかでは、ぼくら「普通の人」にも、ときに可能になる。ここで「普通の人」とは、その領域において「ごくあたりまえの常識人」といった程度の意味だ。ぼくたちは通常、あらゆる物事を、ごくあたりまえの常識どおりに見たり、聴いたりしているからである。

ところが、夢の中では、目覚めているときの常識の束縛がとり払われる。そして、本来は誰にもそなわっている自由な想像力が羽ばたき、飛び回る。そう、夢は人の心を「自由にしてくれる」——その結果、目覚めているときには見えないものが見えたり、聞こえない音や言葉が聞こ

えたりするのだ。

夢を見ているとき、人は誰もが「天才になっている」のかもしれない。

眠りと「人を天才にしてくれる」 夢を遊び楽しむ

では、人はなぜ、どのような脳の働きで夢をみるのか。眠っているわけだから、目で見たり、耳で聞いたりするわけではない。簡単にいうと、脳の視覚野や聴覚野という場所が、あたかも目で見たり、耳で聞いたりしているかのように働くのだ。

そのしくみは、ここでは詳しく説明しない。夢のメカニズムに関する知識は、この小論の冒頭に近い場所で紹介した、20世紀なかばにおける「REM(急速眼球運動)睡眠」の発見をきっかけに急速な進歩をとげた。それに関連する多数の書物が公刊されているので、それらをご覧ください。

ただ、ここでは、夢が「脳の働き」によって生じる点だけは強調しておきたい。「脳の働き」とは「心を動かす」ことにほかならないからだ。そして、その「ところ」は、人それぞれの過去の体験に基づいて、その人の未来のありようを決める上で決定的な役割を果たす。

こう考えると「夢」とは、そんな「ところ」が、みずからをさらけだして姿かたちを露わにすることを通して、自分が何者なのかを教えてくれるメディアだということになる。

それだけではない。最近の脳科学によると、睡眠や夢には、脳が受け入れた情報を整理し、記憶として定着させ、ときに新しいアイデアを生み出す力が潜んでいると考えられるようになった。睡眠や夢には大きな価値が潜んでいそうなのだ。

ところが、先に述べたように、いまどきの日本で「夢」といえば、そのほとんどが「将来実現したい願い」という意味で用いられる。実際、



図6 ゴッホ《星月夜》1889年

多くの仕事柄、つきあうことの多い20歳前後の若い人たちの関心は「自分探し」、その結果、見つかるかもしれない「(将来実現したい願いとしての)夢」、それを実現するための「こだわり」に集中しているように思える。

では一体「自分探し」とは何なのか。今そこにいるのは「自分ではない」のか。むしろ大切なのは「その自分」が「ほかの人たち」に対して「何ができるのか」を考え、実践に移すことではないのか。

そんなことを考えながら、彼らの話に耳を傾けると、「夢」といいながら、彼らは「眠るのがもったいない」と考えているらしいことに気づかされる。たしかに、いまどきの日本では、不夜城と化した街をはじめ、テレビやインターネットなど、さまざまなメディアが面白くて楽しい情報を矢継ぎ早に届けてくれる。だから「眠るのがもったいない」という気持ちも分からないわけではない。

しかし他方で「眠っているときに見る夢」が、一種のメディアとして果たしてくれる役割を思い出す

と、逆に睡眠をおろそかにするのは「もったいない」という気がする。

しかも、彼らが見つけた(と思っている)「夢」に「こだわる」——それは自らの未来を、現在の「自分探し」がもたらす思い込みによってせばめてしまう結果をもたらさないか。むしろ「眠って見る夢」を遊び楽しむ、想像力の翼を大きく広げることが、せまっ苦しい「こだわり」から解放された未来を切り開いてくれるのではないか。

そこで話が、最初に触れた「幼い子どもの遊び」に戻る。無心に何かを遊び楽しむことに「夢中」になっているとき、人の「ところ」は自由に解き放たれている。「眠って見る夢」もまた、それを見ている人の「ところ」を自由に解き放ってくれる。

そんな自分の脳が生み出した夢を優しく眺めるまなざしを大切にす。そこから人生そのものを自由に遊び楽しむ「ところ」が、少しずつ芽生えてくるのではないのか。

最近ぼくは、しきりにそんなことを考えている。